

紫川兄よりのたよりに返すとして：文苑

著者	しほう
雑誌名	龍南會雜誌
巻	8 1
ページ	6 6 - 7 1
発行年	1900-09-30
URL	http://hdl.handle.net/2298/4998

其他何等の陸離たる光彩なま。何等の雅醇なま。以て讀者を眩せまむるものあらず。然も尙禁々とて人を動かすものあるは。唯眞摯の聲あり、熱誠の情あり、相愛の念あるが爲のみ。故に其主題の如何に卑近なるに關らず、一種云ふべからざる生氣あるにあらずや、慰藉の涙あるにあらずや、天上の佳調あるにあらずや。彼は告天子の如き、隴畝より出で上りては、高く碧空に入り以て純眞純情の傳を謠ふ。我は察す、彼既に風に對えてすら上の如く全情の念の激えかりを以て見れば、其の人類に對する全情の如何に博大なりを。もえかくの如き觀念をもつて彼か詩を繙かば、深山の樵夫、海上の漁夫、はた他郷の遊士、彼の春空の告天子に於けるが如く、或は喜び或は慰み以て、其蕭然たる心情と艱難多き境遇を忘れ、如何なる罪人、如何なる惡人といへども、忽ち暗涙の潜然たらざるものなかるべし。我多く彼の詩を誦せず從て彼が人類に對する觀念の如何を、研究する餘地なきを悲むのみ。遮莫此篇を終るに望み、一言以て蔽へば、彼の生涯は、愛と、實と、勇氣との、連續にして以て彼を不朽ならしめたるなり。

文苑

紫川兄よりのたよりに返すこと

見となはせ君、世は秋かせの吹きそめて候ふぞや。

蓬坂山のせきもりに許されてより、すぎ來し山の花影見すてがたく、苔の下みちふ

し
ほ
う

みわけて摘みとりし白玉椿花びらのうへに友の名かきて、親しき人のもどへ贈らばやとて、君が書院の案頭、さゝやかなる磁器の瓶に插まれて、えならぬ移り香をうたゝねの衾におくろししが、夢さめしあした残りなくちりはてしを、君うらめしとおぼしてか、その花びら拾ひとりて、日ねもす泣きくらしたる、今も尙わすれがたくおぼえて。

君もし故郷のそらなつかしと思ひたまはゞ、夫の清き里の小川をしのび候はずや、平和なる太古のれもかげ見する里の中に、天使の秘密さゝやくが如く、小き石の上流れゆく夫の小川！見たまへ、君とわれとこの水涯にたちて、夏の夕べのうつくしき雲のうす紫色なるを指えて、アンフレシヨニスト派のゑがける繪に似たりとて、榮ある夕べのいろの望もてみたされまを神に謝せまとき、君はこの夏川にきらめく新星のかすよみつゝ、神のみそのを聯想たまひしに候はずや。見ませ君、このまづけき里のけまきは、人の子の生れざりま世よりの平和にして、たそらくは神のみ手によりて、つくられしものに候ふべき。されど、この平和もいつか一度は、れぞままき時^{まき}の利鎌もて、薙り去らるべきをれもひ玉はゞ、いづれの世にか永劫のさだめあるものゝ候ふべき。

すぎにし日の夕べ、われこの河頭にたちて、樂まかりま昔を小きわが胸中に描き、幸すくなき二人の友の身の上を忍び候ひき。君はこのわかうどの不幸なるを嘆じて、君が身の瀰弱なるをもはかなみ玉ひぬ。然り君よ、かれら二人は、果敢なきうき世の

ゆめ見はて候はざりき。かれらが見たりといふ人の世は、社會の半面の半面にも及ばざりき。あはれむべきかな、いましき惡魔のかれらが手をとりて、かれらが口に接吻せしとき、うるはまかりま彼等は、未來の望を抱きて、墳墓の人となりはべりぬ。秋風一夜蓬根たちまち飛びて、かれらはまたこの世のものに候はざりき。されども君よ、幸すくなき人のかずに入りしといふ二人の若人は、かへりてさちねはき人の數に、入りまにては候はざりまか。見ませ君、夏の夕べ落ちゆく星のかげ追ひて、天のかなたを想像またまふとき、かれらの魂のありといふ神の御國は、花の如き星うるはまかいかやけるに候はすや。かれらの魂の遊べりといふかまこには、木蘭の花か々膝にねむります女神の眼には、すまき星さへ、影をやどすといふに候はすや。天女の指にふれて、どはに振ふシオンの樂、女神のいぶきに通ひて、長へにひやく天の小琴、こは西の國のうた人だも、聞きえまものどもればえ候はす。されば、天の川原にさく百合のつゆには、無限の慰候ふべく、レバノンの山にてる月のかげには、無限の愛の候ふべく、神の御園に句ふ堇花の句には、無限の情の候ふべま。されど君よ、この月のかげよりも清く、この百合のつゆよりもうるはま、この堇花の句よりも美まきは、女神がさくやかなる胸にひそめる愛に候はすや。

“The moonshine, stealing o’er the scene,

Had blended with the light of eve;

And she was there, my hope, my joy,

My own dear Genevieve."

やさまからずや君、こはコレヰが詩の一ふまにはべり。

この夕べ、われはうすれ行く雲のいろ追ひて、西へくどたどり侍り。白浪沙を洗ふうみべ近く、かの川岸の草ふかきところ、われは多くの小百合あかつきの星の如くゑめるを見いだえ候ひぬ。うつくまきかなこの姫百合！人の生に始めて哲理を生ぜまといふそのむかき、エデンの花園にうゑられて、人の秘密をさゝやぐべく歌はれまより、真理の化身のごとく、詩人の筆にて描がれたるこの姫百合！そがこぼす一滴の白露には、幾千よるづの詩題のふくまれたるに候はずや。

われは何故にこの花の愛すべきかを知らず、只あいらまき故に、あいらまきおもひ候ふ。二項の美田と一本の小百合とは、わが世の中にて尤も願はまきものゝ一つに數へ居り候ふ。百合に行け、さらば學ぶ所あらんとは、我が友錦山のかつてわれに教へたる真理に候ふ。

數十葉の小説原稿抱きて硯友派を睥睨したりし友の、いと幸ねはき身となれるこそうらやましく候へ。かれは花の如き人に慰められて、玉の如き兒に擁せられ候ふ。れもへば望ねはきは、彼がさだめに候はずや。水清き山里にすみ、平和なるホームを作り、あどけなき小兒のちゝとなり、なまき人につまど呼ばれ、花影清き夜のつきに、詩集ひもときつゝあるかれを思へば、申々に亡き數に入りし友の身の、望な

く感せられ候ふ。たばせ君、かの女がるみを豊頬にたゝへて、盃盤の間に周旋し、氷の如き月は松のしげみを透して、冷かなる光を盃の中に投し、いれたるとき、何人か富と名とをかへりみるもの、候ふべきぞ。

泣くべく作られたるものは、終に亦泣くべく此の世を終るものに候ふや。笑ふべく作られたるものは、終に亦笑ふべくこの世を終るものに候ふや。樂に生れしものは、苦に死し、苦に生れしものは、樂に死すといへど、われはさばかり巧みある世の定めともたばえ候はず、見そなはせ、この幸なかりし二人の若人ど、望多き一人の友の身とを。人は終に神の手もて弄ばるゝものに候ふ。

此の年の夏、われ湘南の地に遊び、夕がほの花白きしづが家に、月の半ばをすぐし、事侍りき。日毎濱邊をさまよひて、サンターオールの瑟うちふるふ大和田つ海の底のひいきに、汚れたはきこゝろの塵を洗ひさりつゝ、獨り沙頭にたちて、紅き入日のかげ眺めしとき、われは端なくもキングスレイガヤイの沙道を偲び、候ひぬ。父はかの女にいへり。うつくしきメリーよなれば、チイの沙道をたどりてうせし小羊のむれ求めこよど。あいらまきメリーは、飴の如き髪ふりみだまてかの小羊求めんとて出でゆきぬ。日はくれぬされどメリーは歸らざりき。月はすきぬされどかの女は歸らざりき。あらずくメリーは長へに歸り來らざりき。あはれむべし、かの女はまたこの世のものに候はざりき。

此の夜、われは夢に、うるわしき小女の、小羊引きつれたるを見侍りぬ。彼の女の眼は

夕べの空の水の清きよりも清く、左手に三枝の白百合もち、頭に七つの星をかざせり。われは彼の女の名とはんとて近よりぬ。されど彼の女はうつむきたるまゝに行き過ぎぬ。われは其の名を問ひ得ざるを、名残おほくおもひ候ひぬ。

君がやさしき文に返すとて、われは幾度か硯に向ひ候ひぬれど、かき亂されど心は思ふやうに筆のすゝみかねたれば、なめげなる事のみ申え侍りぬ。されど、君尤め玉ふ勿れ、こは我が夢の如き心の迷ひに候ふなり。

今朝、まがきの下に咲きそめま朝かはの一片、つたなき文の中にまきとへ参らせぬ。君が手にふれんとき迄は、しをれであれどこそねんと参らせつ。

しはう

紫川兄へ

新体詩

なごりの雪

藤輪

望む光明と同うし、學の軒を同くあばら屋に營々、玉の露滋き曉に、殘月を愛づるの樂さ、松青く、波白く寄せ來る磯の夕に、明星の光さ昧ふの樂を共にしたるこそもありき。あるは影うすき夕月に、裏の芝青き小丘に、共に神に祈り、深夜恍茫たる天に輝く星を仰きつゝ、なさけなき孤兒や、哀れ病める寡婦の事など思ひて、世を慨きたるもありき。あるは、